

Dickens と Racism

—— 内的矛盾の変遷 ——

山本まゆみ

はじめに

Peter Ackroyd は *Dickens* (1991) の中で Dickens が racist であると断言した⁽¹⁾。事実、1853 年に書かれた雑誌記事 “The Noble Savage” では 40 代のディケンズの激しい racism が見られる。彼はまず “[...] I call a savage a something highly desirable to be civilized off the face of the earth” (467) と最初のページで主張する。そしてアメリカの画家・作家の George Catlin がネイティブ・アメリカンを “their symmetry and grace, their perfect limbs, and the exquisite expression of their pantomime” (468) と賛美したのに対し、ディケンズは彼らのことを “wretched creatures, very low in the scale and very poorly formed” (468) と呼び反論した。さらにアフリカのズールー族やアイルランド人についても、ディケンズは嫌悪感を示し、結論として、“The Noble Savage” の最後で “My position is, that if we have anything to learn from the Noble Savage, it is what to avoid.” (472) と述べ、“[...] the world will be all the better when his place knows him no more.” (473) とまとめている。ディケンズの野蛮人への憎しみは、憎悪の動詞を 4 つ、‘abhor, detest, abominate, and abjure’ (469) と並べていることでも理解できる。

しかし反 racist の面もところどころに顔を出す。たとえば、“The Noble Savage” の二年後に書かれた *Little Dorrit* (1855-57) 第 13 章で、アーサー・クレナムは、郵便馬車に轢かれた外国人のジョン・バプティスト・カバレットのことを心配し、彼のイタリア語を通訳したり、病院まで付き添い、知らぬ他国にやって来た哀れな旅人に心

⁽¹⁾ In fact missionaries were always one of Dickens’s pet hates, principally because he had no very high opinion of the “savages” of Africa or the West

Indies whom they were trying to convert. In modern terminology Dickens was a “racist” of the most egregious kind, a fact that ought to give pause to those who persist in believing that he was necessarily the epitome of all that was decent and benevolent in the previous century. (572)

遣いを示す。また 1857 年の Angela Burdett-Coutts 宛ての「悪名高き手紙」(Peters 109)では、インド大反乱について、彼がインドの最高司令官なら東洋の民族を絶滅させると述べている (*Pilgrim* 8: 459)。一方、*Bleak House* (1852-53) や *Little Dorrit* (1855-57) に見られるように、弱者を守り、権力者を糾弾する反 racism 的姿勢もまたある。

ディケンズの心を分断する racist と反 racist の側面は複雑にからみあい、ある時はどちらかが強く、またある時は弱くなってディケンズの作品に常に現われているように思われる。本稿では、このディケンズの内面の矛盾を探り、複雑な心理を分析したいと考える。

1. チャールズ・ディケンズの *Sketches by Boz* について

最初に、ディケンズの第一作である *Sketches by Boz* (1836) について、racism の観点から考察しておきたい。Leslie C. Staples は *The Uncommercial Traveller and Reprinted Pieces* (1958) の中で、“His earliest essays, collected under the title *Sketches by Boz*, make up a book which has been described as the Overture to the Opera of Dickens.” (v) と述べている。racism との関連で見ると、さまざまな外国人が物語の中に登場する。20 代のディケンズの心の中で外国人がどのような位置をしめていたのかを示す作品として *Sketches by Boz* は興味深い。

Sketches by Boz は 1836 年に出版された、ディケンズの初めての作品である。その

時、ディケンズは 24 歳で、それまではジャーナリストとして活躍していた。この作品では、何人かの外国人が描かれている。その中には短く言及されるのみのスコットランド生まれの因業な女家主や、赤茶けた頭と赤茶けた頬ひげのユダヤ人の古着屋がいる。特に多いのはアイルランド人で、*Tales* 第一章のボーディングハウスでも、その特性が描かれる。この人物はフレデリック・オブリアリーという名前で、近頃イングランドに移ってきた。まだ田舎丸だして、仕事を探している。彼は何かにつけアイルランドが一番でなければ気に入らなかった。そしてダブリンの大学キャンパスの煙突通風管がすばらしいと自慢する。ある女性にプロポーズするつもりだったのに、他の男性に奪われると、その後、イングランドとイングランド人をののしり憎むようになる。

Scenes 第五章でも、やはりアイルランド人の一家が出て来る。そのアイルランド男は一晩おきに、へべれけになって帰宅し、手当たり次第に住人になぐりかかると書かれている。さらにエクセター・ホールからやって来たアイルランド人の演説者も、*Our Parish* 第六章に断片的に登場し、以下のように、その偏執ぶりが描かれている。

The application was successful, the meeting was held; the orator (an Irishman) came. He talked of green isles—other shores—vast Atlantic—bosom of the deep—Christian charity—blood and extermination—merely in hearts—arms in hands—altars and homes—household gods. He wiped his eyes, he blew his nose, and he quoted Latin. The effect was tremendous—the Latin was a decided hit. Nobody knew exactly what it was about, but everybody knew it must be affecting, because even the orator was overcome.

(39, 下線筆者)

しかしながら、ディケンズの第一作 *Sketches by Boz* の中では、まだ racism が示され

てはいない。外国人に対する見方は穏やかで、ユーモアに満ちている。にもかかわらずアイルランド人演説者の言葉の中には、これからの彼の作品に何度も出てくる“extermination”という言葉が使われている。この語は1642年8月に始まる清教徒革命での、クロムウェルによるアイルランド人虐殺（小池『イギリス史』97）を思わせるが、聴衆は演説者の愛国心に燃えた演説を理解できずにいる。この事実は、外国人とイギリス人との今後の関係を暗示すると言えよう。

Sketches by Boz (1836)以降では、*Oliver Twist* (1837-39) における Fagin へ向けた anti-Semitism が racism の一例として挙げられる。フェイギンは ‘a crafty old Jew, a receiver of stolen goods’ (xxv) と紹介されている。『ディケンズ小事典』ではフェイギンを「ロンドンの下層社会で少年ギャング団を組織し、その甘い汁を吸って金をためているユダヤ人。自分は直接手を下すことなく、計略をめぐらし、他人の働きと犠牲で利益を独占するという極悪人で、最後は悪事がすべて露見して絞首刑に処せられる」(59)と説明し「ディケンズはこの人物を、情状酌量の余地のない悪役として描いているが、後にユダヤ人に対して苛酷すぎたと反省したらしい」(59)とまとめている。その「反省」とは、*Our Mutual Friend* (1864-65) の老ユダヤ人 Riah で、極悪人から ‘a venerable Jew, of noble and generous nature’ (xxv)へと変身している。

2. “The Noble Savage” と “The Perils of Certain English Prisoners” について

次に “The Noble Savage” (1853) と “The Perils of Certain English Prisoners” (1857) を racism の観点から検討する。“The Noble Savage” では四十代のディケンズの激しい racism が見られる。同じく “The Perils of Certain English Prisoners” にも先住民に対する偏見が見られる。それと対照的なのが、同時期に書かれた *Bleak House* (1852-53) と *Little Dorrit* (1855-57) である。両者におけるディケンズの心情を比較してみよう。

1853年6月11日木曜日のこと、ディケンズはハイドパーク・コーナーのセント・ジョージ・ギャラリーでの、ジョージ・キャトリンのズールー族（南アフリカの民族）ショ

ーを見るために出かけた。そして彼の編集する週刊誌 *Household Words* に、その見聞録である “The Noble Savage” という記事を書いた(Peters 1)。その内容はロマン主義文学で理想化された原始人を否定するもので、ズールー族の身体的特徴を細かく描写し、野蛮な動物だと評し、ブッシュマンの殺害が正当な殺人と考える。さらにズールー族が「皆殺しの戦い」(wars of extermination) (469) に喜びを見出し、道徳的感情を持たないと断言している。ここでも *Sketches by Boz* (1836) で用いられた “extermination” という語が現われる。この記事は野蛮人を全面的に否定して論を締めくくっている。

次に “The Noble Savage” と同時期に書かれた *Bleak House* (1852-53) を見ると、アフリカの開発計画に没頭し、ニジェル河の左岸でのコーヒー栽培とポリオブーラ・ガーの土民教育の実現を目指す、ミセス・ジェリビーが登場する。この女性に関して、Richard D. Altick は “that groundless idealization of dirty, subhuman members of other races impeded the far more urgent practice of charity at home” というのがディケンズの強調した点だと述べている (Altick 283)。オールティックは、1853年の春に『アンクル・トムの小屋』の著者ハリエット・ビーチャー・ストウ夫人が来英し大歓迎されたこと、ならびにズールー族のロンドンでのショーの開催されたことが、ディケンズの「高貴な野蛮人」攻撃のきっかけだったと指摘している (Altick 283)。

“The Noble Savage” の三年後に書かれた “The Perils of Certain English Prisoners” は、英国海兵隊の兵士、ギル・デーヴィスが語る 1744 年の物語である。舞台はカリブ海のある島で、先住民のクリスチャン・ジョージ・キングも重要な役割を果たす。一人のイギリス人女性はクリスチャン・ジョージ・キングについて信用できる人物だと断言する。しかし語り手のギルは先住民に対して偏見を持っている。折しも海賊船が現われ、その時クリスチャン・ジョージ・キングの裏切りが明らかになる。海賊にはマレー人、オランダ人、黒人などが含まれていた。イギリス人たちは海賊の捕虜になった後、逃げ出すが、途中でクリスチャン・ジョージ・キングは裏切り者として、射殺された。

「現実と虚構の狭間で——ディケンズとセポイ反乱」において、加藤匠は、“The Perils

of Certain English Prisoners”がセポイ反乱と関係があることを指摘している（加藤 93）。セポイの反乱は 1857 年に始まる、インドのあらゆる階級・階層が参加したイギリスに対する武装反乱であったという（大野 519）。しかし、ディケンズは時代を 18 世紀に設定して、直接、このセポイの反乱を題材としていない。

野蛮人を全面的に否定する “The Noble Savage” と異なり、“The Perils of Certain English Prisoners”には先住民のクリスチャン・ジョージ・キングを賞賛する場面が二か所ある。まず第一に、語り手のギルがイギリス人女性にクリスチャン・ジョージ・キングは信用できるのかと尋ねると、彼女が肯定する場面がある（169）。第二に、語り手のギル自身がクリスチャン・ジョージ・キングの働きぶりを賞賛する場面もある（172）。しかしクリスチャン・ジョージ・キングが裏切り者だとわかった後で彼を射殺する場合には、問答無用で、彼は弁明する機会も与えられずに、殺された後、木につるされる。野蛮人の肯定はあくまでも部分的、限定的でしかなかった。

“The Perils of Certain English Prisoners” と同時期に書かれた *Little Dorrit* では、第五章で役所仕事の無責任さが痛烈に批判されている。主要人物の一人のアーサー・クレナムが役所を訪れても、たらいまわしにされるだけで、役人たちは仕事をしないことをモットーにしている。小池滋は『リトル・ドリット』の解説で、「ディケンズが構想を温めかけていた 1855 年初頭、イギリスはロシアを相手にクリミア戦争の真っ最中だった」（408）と指摘し、さらに「イギリス政府のお偉方たちは、遠い戦場で苦しみをなめている兵士のことなどはあまり考えず、相も変わらず昔のままのお役所仕事をつづけていた」（408）と書いている。クリミア戦争の後にインドで反乱も起こり、ディケンズの眼はイギリス国内と国外の状況に向けられ “The Noble Savage” を書いた頃よりも深く複眼的に考察するようになっていた。

“The Noble Savage” と “The Perils of Certain English Prisoners” を比較すると、“The Noble Savage” は完全な racism と言える。これは雑誌記事で、6 ページほどと短く、内容が凝縮されている。その一方、“The Perils of Certain English Prisoners” は不完全な

racism である。これは *Household Words* のクリスマス特集号に掲載され、先住民のクリスチャン・ジョージ・キングは不完全な英語を話す愛すべき人物として描かれている。1853 年頃に書かれた “The Noble Savage” と *Bleak House*、1857 年頃に書かれた “The Perils of Certain English Prisoners” と *Little Dorrit* をそれぞれまとめて考えると、ディケンズの眼が常に自国民、自国の状況に向けられ、他国民、他民族は邪魔なもの、想定外に感じられたという仮説が導き出せる。

3. ディケンズは本当に racist なのか

そこでディケンズが racist なのかを、1857-59 年のインド大反乱や、1865 年のジャマイカ事件に対する彼の反応を見ながら考えてみよう。キーワードは “extermination” という語だが、この語がディケンズによって、どのように用いられたかを考察し、彼の心理を分析しておきたい。ここで “extermination” という語は恐ろしい意味を持つが、ディケンズにとっては珍しい語ではなく、いくつかの作品に現われる。さまざまな証拠から、ディケンズの主張を取り上げ、彼の視線が自国民に向いていたことに着目したい。

年代順にディケンズの創作過程をたどるために、1853 年の “The Noble Savage” を書くきっかけとなった、キャトリンのズルー族のショーについて見てみよう。アメリカ西部の辺境でインディアンに混じって 8 年間を過ごしたキャトリンは、1840 年頃から、彼の描いたインディアンの酋長たちの肖像画などをイギリスで一般公開し始めた (Altick 275)。1843 年にはアメリカの見世物師アーサー・ランキンが本物のインディアンのスペクタクルを公開し、賞賛されたが、失望する者もいた (Altick 276-278)。このような野蛮人の提示は、イギリス人の独善的な人種的優越感に大いにアピールし、彼らの自惚れを満足させた (Altick 279)。『パンチ』誌はイギリス人のアフリカ原住民族に対する感傷的なへつらいを批判し、ロンドンの「スラム街の野蛮人」に対する無関心を非難した (Altick 282)。ディケンズも『パンチ』誌と同様の意見で、それが “The Noble Savage” や *Bleak House* での野蛮人への攻撃となったというのがオールティックの結論である (Altick 283)。

次にディケンズの *racism* を助長させた第一の事件である 1857 年のインド大反乱（セポイの反乱）について検討する。東インド会社が強引な政策をとったために、インド各階級の不満は爆発点にたっし、1857 年セポイの連隊が武装蜂起をおこした。イギリスは徹底した掃滅戦によって 1859 年までに反乱を鎮定した（大野 519）。Laura Peters は *Dickens and Race* で、*Illustrated London News* の 1857 年 10 月 3 日の記事をこう紹介している。“[...] the final stance taken by the ILN coverage was an advocacy of extermination: it wished that the Indian mutineers ‘had not only been disarmed but exterminated’ ” (Peters 109 下線筆者)。ここにも“extermination”という語が使われ、インドの暴徒の絶滅を要求している。そしてインド大反乱に対するディケンズの反応は、1857 年 10 月 4 日の Burdett-Coutts あての「悪名高き手紙」(Peters 109)の中に見られる。彼はまず最初に『タイムズ』への読者の手紙を紹介している。それには人々の戦闘部隊への無関心が指摘されていた。また軍隊に入隊していない階級があることも書かれていた。ここでディケンズは、軍隊が報酬を一般市民の手の届かないところに置く組織だと批判し、自分がインドの最高司令官なら、インド人を絶滅させるために最善を尽くし、東洋の民族を皆殺しにして、地球上から取り去る (Pilgrim 8: 459) と書いている。しかも“exterminate” “blot out” “raze” と三回も「絶滅」を意味する動詞が用いられ、内容が強調されている。

Lillian Nayder は *Unequal Partners: Charles Dickens, Wilkie Collins, and Victorian Authorship* において、ディケンズの Burdett-Coutts あての「悪名高き手紙」(Peters 109) について、彼の *racism* は帝国の不安と同様、国内の不安によって引き起こされたと述べている。つまり、インド人への敵意ばかりでなく、イギリス国内の階級間の緊迫状態が大反乱によって表面化したのだ (Nayder 101)。ディケンズの「絶滅させよ」の過激な発言は、実際には悲鳴に近いのではないだろうか。昇進の見込みのない軍隊は新兵が入隊せず、やがて弱体化していく危険がある。インド大反乱へのイギリス軍隊による報復が困難になる可能性もあっただろう。

インドでの反乱に次いで、ディケンズの racism を助長させた第二の事件は、ジャマイカ事件である。Laura Peters によると、1865年10月11日、ジャマイカの地方警察本部が黒人により襲撃された。目的の一つはジャマイカの貧しい黒人の苦境に注目させるためだった。総督ジョン・エアは400人のジャマイカ人を殺し、600人をむちで打った。ジョン・スチュアート・ミルやチャールズ・ダーウィンは、エアの殺人について裁判を要求した。しかしトーマス・カーライル、ジョン・ラスキン、そしてディケンズはエアを英雄視したという(Peters 136)。さらにディケンズは1865年11月30日の手紙の中で、ジャマイカの反乱について述べ、黒人は悪魔だと断言し、黒人に同情する演説に激怒した。そしてエアを擁護し、エクセター・ホール(福音派の本部)の伝道師や政府を批判していた(Peters 137)。もちろん“extermination”という語を連発するディケンズを racist だと結論を出すのは容易だが、この過激な語をディケンズは1868年10月10日に出版した雑誌記事の中でも用いている。それは彼がスリにあった時の話で、むちうちの刑が泥棒にふさわしい罰で、彼らを絶滅させるべきだと主張していた(Peters 139)。ディケンズは確かに racist の面を持っている。それ以上に彼が問題視していたのは、ロンドンの通りで出会う小さな野蛮人のような子供たちで、貧困ゆえに人間以下の人間になろうとしていた(Peters 139)。ディケンズは彼の時代が退化していると主張した。その理由は、文明が最も文明化された人間を生み出す代わりに、内部に野蛮な民族を生み出しているからだ(Peters 140)。“race”という語は、もはや異民族を問題にするのではなく、イギリス国内の子供を含む弱者を指すようになっていたのだ。

おわりに

ディケンズが racism を越える瞬間が、1857年頃に書かれた“The Perils of Certain English Prisoners”での先住民クリスチャン・ジョージ・キングを賞賛する場面や、エジプシャン・ホールで見た未開人の想像力を強調する時(Altick 281)に現われる。ディケンズは、決して盲目的な racist ではなかったのだ。ディケンズの伝記を書いたアクロイ

ドは 1847 年に、*Jane Eyre*、*Wuthering Heights*、*Vanity Fair* が現われ、ディケンズに影響のあったことを述べている (Ackroyd 568-571)。そしてディケンズは、自身の過去に向かい合い、時間と歴史の関係の中で自身を観察し、新しい視点を作り、彼の周囲の世界のより広い面を認識するようになったのである (Ackroyd 571-572)。

ディケンズが racist か否かを確認するために、彼の最後の作品を検討しておきたい。それは未完に終わった *The Mystery of Edwin Drood* (1870) で、Laura Peters はこの物語が東洋の野蛮人によって汚染された文明を描いていると指摘している (Peters 153)。中心人物であるランドレス兄妹は、セイロン生まれで、親の一人はイギリス人で、家系と家庭(故郷)を持たない。東洋の危険な動物と描写された二人は外国の他者にすぎない (Peters 153)。二人の帰国と受け入れはディケンズにとって、より大きな問題を指し示した。その問題とは、当時のイギリスの愛国心の独我論的性質で、それは生命力を失って再生できない文化だった (Peters 154)。もはや、*The Mystery of Edwin Drood* の世界には racism は存在せず、ランドレス兄妹の両親のような異人種間結婚が多く見られる。登場人物の一人のジャスパーは、不自然に色の黒い人物で、アヘンを用いて退化し、植民地でなく、帝国の中心のロンドンで原住民となっている (Peters 155)。

ディケンズが最後に描いた世界は民族の境界線があいまいで、混ざり合い、racism が成立しがたいものになっていた。もはや racist のディケンズは消滅し、異民族が中心となって活躍する物語が展開していった。主役のはずのイギリス人のエドウィン・ドルードは早々と物語の中から姿を消し、その後は非イギリス人のランドレス兄妹が中心となって展開する。この racism の消滅した世界が晩年のディケンズの眼前に展開していたものだった。ディケンズはその中で最後まで物語を書くことを断念しようとはしなかった。racism の存在しない世界を受け入れつつ、最後まで小説の可能性を探究した。そしてディケンズの racism は、他人種の否定から、他人種の肯定へと変化していたのである。

©本稿は 2013 年 10 月 26 日 (土) 2013 年度法政大学英文学会での発表を修正、加筆し

たものである。

引用文献

Dickens, Charles. *Bleak House*. The Oxford Illustrated Dickens edition. Oxford: Oxford UP, 1987.

——. “The Perils of Certain English Prisoners.” *Christmas Stories*. The Oxford Illustrated Dickens edition. Oxford: Oxford UP, 1987.

——. *Little Dorrit*. The Oxford Illustrated Dickens edition. Oxford: Oxford UP, 1987.

——. *Oliver Twist*. The Oxford Illustrated Dickens edition. Oxford: Oxford UP, 1987.

——. *Our Mutual Friend*. The Oxford Illustrated Dickens edition. Oxford: Oxford UP, 1987.

——. *Sketches by Boz*. The Oxford Illustrated Dickens edition. Oxford: Oxford UP, 1973.

——. “The Noble Savage.” *The Uncommercial Traveller and Reprinted Pieces*. The Oxford Illustrated Dickens edition. Oxford: Oxford UP, 1968.

——. *The Letters of Charles Dickens*. The Pilgrim edition. Vol. 8. Oxford: Oxford UP, 1995.

Ackroyd, Peter. *Dickens*. London: Minerva, 1991.

Altick, Richard D. *The Shows of London*. London: Harvard UP, 1978.

Nayder, Lillian. *Unequal Partners: Charles Dickens, Wilkie Collins, and Victorian Authorship*. New York: Cornell UP, 2002.

Peters, Laura. *Dickens and Race*. Manchester: Manchester UP, 2013.

大野真弓編『イギリス史』山川出版社、1980。

加藤匠「現実と虚構の狭間で——ディケンズとセポイ反乱——」『桐朋学園大学紀要』第31号、桐朋学園大学、2005。81-103。

小池滋『もう一つのイギリス史——野と町の物語』中公新書、中央公論社、1991.

小池滋訳『リトル・ドリットⅡ』集英社、1980.

松村昌家編『ディケンズ小事典』研究社出版、1994.